

診ます会

トピックス

- ・診ます会総会開催報告
 - ・平成20年度活動計画
 - ・講演会報告
- ・RenkeiNET@システムを利用して
- ・新任医師の紹介
- ・今後の講演会、症例検討会のご案内

診ます会の平成20年度総会が開催されました。

去る6月5日に、ホテルキャッスル（山形市）にて平成20年度診ます会総会が開催されました。来賓に村山保健所 所長 山口一郎先生、山形市医師会会長 徳永正靱先生、上山市医師会会長 佐藤紀嗣先生をお迎えし、また、診ます会会員、地域医療連携推進協議会委員の90名を越す先生方のご出席を賜り、盛会の内に終了いたしました。これもひとえに諸先生方のご厚情の賜物と深く感謝を申し上げます。

本年は診ます会役員の改正の年にあたり、昨年同様、会長に佐山雅映先生(佐山クリニック)、副会長に徳永正靱先生(とくなが整形外科医院)、根本元先生(ねもとクリニック)、平川秀紀済生館館長が就任されました。また会則の一部改正が承認され、幹事として門馬孝先生(もんま内科皮ふ科医院)、本年より新しく設置されました顧問に青山新吾先生(青山医院)が就任されました。



RenkeiNET@ システムを利用したの病診連携について

診ます会総会では済生館の電子カルテを先生方に閲覧していただけるシステム「Renkei NET@」につきまして、済生館の医療情報推進担当である岩淵医師より説明をさせていただいたほか、パソコンを準備し、実際に「Renkei NET@」を動かし、ご参加いただいた会員の先生にシステムを体験していただきました。

高野せきね外科眼科クリニック 関根智久 先生



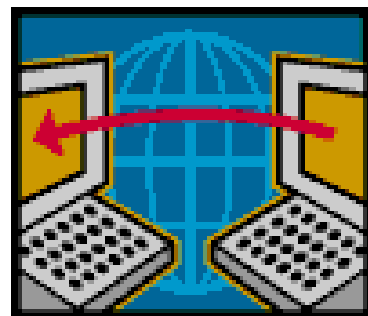
いまずぐ知りたいというのは、この情報社会にとって当然の思いでしょう。開業してから10年が過ぎ、多くの病院に患者さんを紹介してきました。自分の診断が正しかったのか？その後その患者さんはどうなったのか？どんな治療、手術をされたのか？等々、そんな積もる思いをはせながら紹介先の病院からの返事を待っていたものです。そう思いはしながらも、私が大学病院に勤務していた時には、もう忙しくて返事も書く暇がないというのが実情でした。ひどい時には患者さんが退院して元の開業医に戻って行ったあとに、報告が届くのも稀ではありませんでした。今、逆に開業医になって初めてその現実を体験し、ああやはり返事や報告は早めにしておけばよかったなあと反省しています。

IT化が進化した今日、この状況を打破したのが山形市立病院済生館がはじめたRenkei NET@ではないでしょうか？パソコンに入力した患者さんの情報がリアルタイムに紹介先に伝わるシステムはまさに医療界待望の革命と言ってもいいでしょう。そのメリットを列挙します。

- ① 検査結果や処方内容等を紹介先の医師が確認できることにより、情報の共有ができ、患者さんにとって不必要な採血や検査の無駄が省け効率があがる。
- ② 紹介医にとって、その後の患者さんの情報をリアルタイムに得ることにより自分の診断能力向上のための学習効果があがる。
- ③ (これは以前から済生館の担当先生に進言していることですが) 現在、勤務医が紹介先の医師へ、患者さんが来院した旨や治療経過と退院報告等を書面で送付していますが、将来的にこれらは全て不要であり RenkeiNET@システムで充分足りる。すなわち勤務医の仕事量の軽減につながり、診療効率があがる。

まだまだ他にもあると思いますが、さらなる向上が期待できるものです。できるならばこれを採用していない他の大病院にも取り入れてもらいたいと思うばかりです。

最後に少なからず苦言をひとつ。パソコン入力は慣れないと、大変な労力であることだとお察しいたします。が、慣れてしまうと私のように金釘流の文字も非常にわかりやすいものとなり、書いた内容にも責任を負うことでいい加減なこともできません。現在の RenkeiNET@の書いた内容を読みますと、事務的な表現ばかり目について味気がありません。『本日、退院した。』ではなく例えば『本日、家族とともに笑顔で退院した。』とでもしてくれたら、ああよかったねと思うのは私だけではないでしょう。僅かでも余裕ができたなら是非お願いいたします。これからの RenkeiNET@のさらなる発展も含めて。



◆ 館長あいさつ ~ 診ます会ニュースレター第20号発行にあたり ~

山形市立病院済生館 館長 平川 秀紀



いつも格別の御支援と御厚情を賜りまして心から厚く御礼を申し上げます。お盆過ぎから急に秋風が吹き出し凌ぎやすい天気となりました。日本の政治や官僚組織にも秋風が吹いておりますが、政治や行政がしっかりいたしませんと末端のわれわれ医療の現場は常に混乱いたします。5年先10年先を見通した政策の立案と実行が待たれます。済生館でも厚労省の勧める質の高い効率的な医療を目指しておりますが、在院日数も13日を切るまでになり、済生館にも秋風が吹きぬけております。入院期間の圧縮が目的ではなく、退院前に時間を取り十分に患者さんや御家族に入院治療内容と療養の指導を行なうように指導しているところでございます。

7月には過去最高となります、1180人ほどの患者様を御紹介賜りまして有り難うございました。患者さんやご家族の方に満足していただけるのみでなく、医療の専門家であります先生方にも御理解いただける医療提供を行なってまいりたいと思っております。シームレスでしかも十分な情報を御利用いただける Renkei NET@も44施設の先生方に御利用賜り、登録患者数も900人を越えております(4月から閲覧期間を6ヶ月間に変更)。近日中に現在御利用または今後御利用を計画されている先生にお越しいただき、利用しやすいシステムへのバージョンアップについてご検討を頂く予定にしております。この度、このシステムにつきまして、関根先生に御執筆いただき苦言も賜りましたが、このシステムが先生方と患者さんと済生館の架け橋になりますよう、心のこもった記録をはじめ診療内容の向上に、職員一同研鑽を積んでまいりたいと思っております。

今後とも先生方の暖かい御指導と御支援と、厳しい叱咤の程を宜しくお願い申し上げます。

◆ 診ます会講演会 (平成20年6月5日)

総会に引き続き行われた講演会では、「地域医療連携パスの活用」というテーマで当院の3名の医師よりそれぞれご講演いただきました。

1 『大腿骨頸部骨折パス』 整形外科医長 二瓶治幸

大腿骨頸部，転子部の疾患の分類については，関節内骨折と関節外骨折，転子下骨折という大きな分類に分けられますが，地域連携パスの対象疾患としてはこれらの骨折すべての術後の患者さんを対象としています。

当院での地域連携パスを使用しての大腿骨頸部骨折の患者数は昨年4月から2月の間に114例です。男性が20例，女性が94例，平均年齢は81.9歳で，男性が76.5歳，女性が83.5歳です。

大腿骨頸部骨折は49例で手術の内訳は，CCHSが17例，CHS2例，BHA11例，保存療法を行った方が19例です。大腿骨転子部骨折については59例，保存例が10例で49例が手術です。大腿骨転子下骨折は6例で，髓内釘による固定が5例で，保存例が1例となっています。

手術をされた方でパスを使えた方と，通常のリハビリを行った方との比較ですが，手術症例は114例中84例で，平均入院日数が44日，地域連携のパスを使用された患者さんは手術84例のうち21例で平均入院日数が24日です。

以上のように，地域連携パスを使用してのリハビリは明らかに入院日数の短縮が認められていることがわかつています。



2 『脳卒中地域連携パス』 診療技術部長（兼）脳神経外科長 齋藤伸二郎

山形市医師会徳永会長のご発案で，昨年1年間かけて脳卒中地域連携パスが作成され，この4月から使用ということになっております。私もワーキンググループで作成に関わった経緯がありますので，このパスについて紹介させていただきます。

脳卒中は，発症から自宅退院までを一施設だけでできるものではないのは先生方ご存知のとおりで，そういう意味では連携が非常に大事な疾患の代表です。済生館では今までも診ます会の先生方と協力してやってきておりましたが，施設間で情報の交換ということに関して，受ける側，送る側ともに不自由を感じていたというところでした。

そういう時期に山形市医師会からこういうものを作りましょうということで，医師会，急性期病院，回復期病院及び在宅医療の立場での先生方がワーキンググループに参加し，また看護師，保健師，社会福祉士，言語聴覚士，作業療法士，山形市介護福祉課，ケアマネージャー及び地域包括支援センターの代表の方とも，実際の運用方法についてディスカッションを重ねてきました。

そして，このパスシートを今年の2月からワーキンググループの施設でトライしてみようということになりました。概念は回復期の病院が受けるにあたって必要な情報，リハビリを遂行していくうえで必要最小限の情報が何かということを中心として，あとは共通の評価基準を作りましょうということだけで，施設での入院期間，診療内容などについての規定はありません。

構成は医療者用のオーバービュー，患者さんに手渡す入院説明書兼同意書の2枚です。そして重篤な合併症を有する患者さん以外はすべて対象とし，医療者側のパスを診療情報提供書に代えるということです。医師，看護師，リハビリスタッフが情報を入力しますが，この1枚ですべて集約されているということになります。

特徴としては，回復期病院を退院したとき，在宅になった場合も急性期病院へ情報のフィードバックがかかることです。バリエーションもほとんどありません。

現在，ワーキンググループの国立山形病院，篠田病院のスタッフの方々と済生館で何例ものやりとりをしておりますが，仕事が非常に迅速に出来るようになりました。脳卒中パスは患者さんだけでなく，私どもそして診ます会の先生方の幸せにもつながるものだということによってやっております。



糖尿病の手帳ですが、これはもう何十年前から使われており、医師にも患者さんにとってもかなり親しみのあるものです。そして糖尿病という病気は自己管理の病気でもありますので、患者さんとの診療情報の共有ということが重要だと思いましたが、これがすでになされています。また携帯に便利ですし、長期間使用が可能です。わざわざ患者さん用のパスを作っても枚数、書き込む内容が多くなり非常に扱いづらいものになるのではないかと考え、当院の糖尿病手帳を改訂し、連携手帳とさせていただきました。



改訂にあたり診療計画ということで、治療目的の明示、個人のコントロールの目標の設定、そしてこれが最も重要なのですが、合併症の情報の一元管理、それから次回の検査の予定時期、こういったものを付け加えさせていただきました。

記載項目は、患者情報と連携医療機関名、初診時の記録、一般的な管理目標、それから個別に設定できるコントロールの目標です。合併症についてですが、細小血管合併症では、網膜症、腎臓、神経障害の検査予定と実施年月です。大血管合併症では、心疾患は心電図、運動負荷心電図、必要に応じて心エコー等を取り込んでおります。脳血管系に関しましては、脳CT、頸動脈のエコーなどです。それから治療法の変更や、栄養指導などの療養学習も記録します。糖療養経過というページでは、体重、血圧、血糖、HbA1C、脂質、尿一般検査結果を記載します。

今後の取り組みですが、患者さんに分かりやすいように、説明の意味を含めたオーバーパスの作成です。患者さんへ検査の意義や間隔についての情報提供をするということも取り込めていければと思っています。それと連携をするうえで地域での糖尿病診療の質を上げていくという勉強会で、定期的な開催が必要と思います。

このような形で、これはまだ病院側で作ったものですが、これもまた先生方のご意見を取り入れて見直しを行い、よりよいものに改訂していきたいと思っています。



診ます会会則の一部改正（抜粋）

第5条 本会に、次の役員を置く。

(1) 会長 1名 (2) 副会長 3名 (3) 幹事 若干名

第6条 会長は、会員からの推薦により選出し、総会において承認を得る。

2 副会長、幹事は会長が指名し、総会において承認を得る。

第8条 本会に顧問を置く

2 顧問は、重要事項に関し会長の諮問に応ずる。顧問は幹事会の推薦により会長が委嘱する。

診ます会平成20年度の事業計画については、以下のとおり承認されました。

診ます会 平成20年度 活動計画

1. 連携医療の推進

①確実な紹介患者管理 ②逆紹介の推進 ③退院支援 ④疾患別連携の拡大と連携パスの活用
⑤共同病床・機器の利用促進 ⑥診ます会広報誌の発行 ⑦情報共有化のためのIT活用

2. 在宅医療支援

①24時間緊急時入院受入れ体制の整備 ②非緊急時の各診療科受入れ体制と院内連携の整備
③栄養管理、感染対策、疼痛コントロールなど在宅医療に必要な医療研修会の開催

3. 地域医療従事者研修の充実

①診ます会総会の開催（年1回） ②診ます会講演会の開催（年4回）
③済生館がん治療症例検討会の開催（年4回） ④済生館症例検討会の継続（年5回）
⑤医療連携研修会（医療と福祉・介護の連携）の実施（年4回）



臨床検査室長（病理医） 松田 幹夫

臨床検査室病理の松田幹夫と申します。前任の山形県立保健医療大学で11年間、看護、理学療法、作業療法のコ・メディカルスタッフの教育育成に携わっておりました。本年4月より病理の現場に復帰しました。济生館のハイレベルな医療の維持向上のために精進して参りたいと思います。今後ともよろしくお願ひ致します。



人工透析室長（内科医長） 出川 紀行

この4月に山形県立日本海病院から济生館に赴任し、腎臓内科、透析を担当しています。昨今、慢性腎臓病がcommon diseaseとして、注目されており、この腎臓病の治療には、病診連携がかかせないものとなっております。診ます会の先生方とのより一層の連携をめざし治療に精進したいと思いますので、ご指導のほどよろしくお願ひ致します。



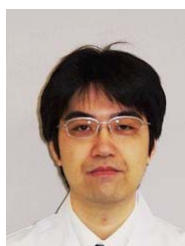
脳神経外科医長 小久保 安昭

4月からお世話になっております脳神経外科の小久保です。济生館は日々多くの脳卒中患者さんが運ばれてきますが、脳卒中診療は急性期から回復期まで地域の医療機関との連携が非常に大切でありますので、今後ともよろしくお願ひいたします。



小児科医長 橋本 多恵子

平成10年山形大学卒の橋本多恵子と申します。昨年度まで大学院で腎系球体の上皮細胞の研究をさせていただいておりました。久々の臨床の現場で緊張の毎日です。専門は小児腎疾患ですので、患者様のご紹介いただければと存じます。よろしくお願ひ致します。



消化器科医長 松村 吉史

4月から消化器科に勤務しております松村吉史です。3月までの4年間は、東北大学大学院消化器病態学講座で下部消化管疾患とくに炎症性腸疾患を中心に診療・研究を行ってまいりました。まだまだ若輩者ですが、よろしくお願ひ致します。

これからもよろしくお願ひ致します。



診ます会講演会（平成 20 年 6 月 27 日）が開催されました。



去る6月27日18時30分より、済生館4階大会議室におきまして、（静岡）県西部浜松医療センター感染症科科長兼衛生管理室長の矢野邦夫先生による「抗菌薬の適正使用について」の講演をお聞きしました。当院外科主任医長の妹尾和克医師が座長となり進行した講演会は、感染対策の重要性が増すなか、大変有意義なものでした。



☆ 診ます会談話会

テーマ：「開業医が望む病診連携」

日 時： 平成20年10月29日（水） 午後6時30分～
場 所： 山形市立病院済生館 4階 大会議室
そ の 他： 日本医師会生涯教育制度指定講習会（3単位）

司 会： 佐藤 清 先生（佐藤清医院）
話題提供： 矢作 祐一 先生（やさく医院）
後藤 成治 先生（ごとう医院）
白壁 昌憲 先生（白壁内科クリニック）



☆済生館 症例検討会(第126回 平成20年度 第3回)

日 時： 平成20年9月10日(水) 午後7時～午後8時30分まで

☆済生館 第8回がん治療症例検討会

日 時： 平成20年10月8日(水) 午後7時～午後8時30分まで

※検討したい症例がございましたら、ご一報ください。
※両方とも会場は、山形市立病院済生館 4階中会議室になります。
また、日本医師会生涯教育制度指定講習会(3単位)になります。

☆今後の日程

症例検討会(第127回 平成20年度第4回) 平成20年11月12日(水)

なお、済生館ホームページでも日程等、ご覧いただけます。